

ひと・まち・自然

トウまち Press (一財) 世田谷トラストまちづくり情報誌

January 2020

Vol. 18



特集

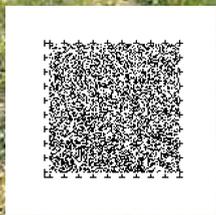
「まちの里山」にも あらゆるいのちが 息づいている



P7
「まち」へ「参加」することの意味
甲斐 徹郎さん

P9
せたがや散歩日和 第18回
新しい街並みの間に、
重層的な歴史の積み重ねを
見つけつつ歩く

P12
未来を紡ぐ人
高野 雄太さん



上の「音声コード」に、本誌の概要を記録してあります。
専用の読み上げ装置を使用して、音声で内容聞き取ることができます。

「まちの里山」にも あらゆるいのちが 息づいている

ここは成城三丁目緑地。

樹と草と鳥と虫、そして湧水。

自然の織りなす時が流れるなか、

無数のいのちが今日も静かに私たちの

訪れを待っています。



「成城三丁目緑地」は、
かつての御料地から営林署官舎地を経て、
今わたしたちが育てる「まちの里山」になりました。
国分寺崖線の連なりに支えられた約2ヘクタールの
“まちのオアシス”です。



立川から続く「国分寺崖線」。
区内でも7kmに渡ってみどりの帯
をなし、貴重な自然環境が残さ
れています。

成城三丁目緑地も、この国分
寺崖線の一部で、みどりの保全
を目的に世田谷区が農林水産省
から購入した緑地です。

緑地内には、斜面林とともに
2箇所湧水地があります。成
城の住宅街の中にながら自
然が多く残され、サワガニやカブ
トムシなど様々な生きものたちを
観察することができます。

現代の生活にあった「まちの里
山」をテーマに、地域住民が中
心となって住民参加によるみどり
の空間づくりを行っています。



村松さん



栗林会長



馬場さん

今田さん



伐採した木は、
園路の補修や
ほだ木などに
活用



体験教室では
きよみづ橋で
流れる湧水と
水生生物を観察



成城三丁目緑地里山づくりコア会議



松ぼっくりの
花炭



コア会議の活動の1コマ。
植物の調査・保全活動



まちな 里山を守り、 はぐくむ。

も気になる。樹木の高齢化としたら、今後管理方法を見直す必要があるかもしれないと危惧する。また、その緑地単体での環境を守っていくという見方と同時に、国分寺崖線という大きな括りで貴重な環境をとらえることも大切だと考えているという。

手を入れず、利用しないとただの藪になってしまう里山。ゴールドマン・サックスの社会貢献プログラムや、里山授業として関わってくれる明正小の子どもの力も大きい。里山づくりの今後に向けて、他の団体などにも協力を得て、さらに盛り上げていきたいと結んでくれた。

メンバーの今田さんも区内での緑地保全との関わりが長い。「何より湧水があつて生きものが多いし、斜面があるのも実にいい！まだまだ発見できていないことがたくさんある」と、三丁目緑地の魅力は言い尽くせないという今田さん。

主催する里山体験教室は、今年で17年目。魅力を幅広く伝えるために毎年プログラムの工夫を重ねてきた。萌芽更新のために伐採された木をほだ木にし、実験的に椎茸づくりにも取り組んでいる。昨年からは、収穫できるようになった椎茸できのこ汁をつくったり、緑地内の松ぼっくりを集めて花炭を作ったりと、里山の循環が

成城三丁目緑地をまちな里山として育てていこうと集う『成城三丁目緑地里山づくりコア会議』。会長の栗林さんは、なんと70年近くこの緑地を眺めてきたという。碓小学校に通う栗林少年は、この下をいつも通りながら、遊ぶ場所を物色。当時ほどこも舗装されておらず赤土が広がり、横穴式古墳なども子どもたちの格好の遊び場になっていた。当時このあたりの湧水は水田に引かれ、野川には水車がまわる：そんな風景が広がっていたという。

長じて、緑地の近隣に住まうようになると、栗林さんは朝な夕なに緑地を散策。みどりに魅了されつつも、人の手が入っていない緑地の保全について思案し始めていた。

折しも、世田谷区が区全体をフィールドとしてみどりの保全と活用を市民参加で促進するプロジェクトを企画。その『エコビレッジ構想』の会議に誘われた栗林さんは、『国分寺崖線の緑保全と活用』チームに参加。

複数の候補地の中から、手付かずだった成城三丁目緑地が選ばれ、『せたがや里山づくり』プロジェクトがスタートする。それとともに、地域住民・学校・行政からなる『里山づくりコア会議』が2001年7月に発足した。

現在は平均10名ほどのボランティアが定期的集まり、ササ刈りや竹の

より体験できるものになってきている。楽しむ参加者を見て、ここでしかできないことが、できるようになってきたと実感したという。

「かつての循環型のライフサイクルの一部を体験することで、これから先のエネルギーや暮らしについて考えるきっかけにもなるのでは」とも。

三丁目緑地は自転車で来られる近さが私にとつての最大の魅力という馬場さん。「色々なことをやりたいと思わせてくれるこのポテンシャルを感じています」という言葉どおり、体験教室をさまざまな工夫とアイデアで盛り上げている。小さいころに緑地で目いっぱい遊んだご子息が、目下大学の森林学科に在籍とあつて、「子ども時代に自然に触れていれば成長してから戻つてこられるはず」との持論にも説得力がある。

さらにまちな里山には防災のための新たな可能性もあるはずと、今田・馬場両メンバーはうなずく。

今、成城三丁目緑地は生きものにとつて『いわば駆け込み寺』（今田）にもなっている貴重な場所。在来動植物を守るとともに、今後ここにある環境が周囲に広がり、波及していく重要な拠点であるとすれば、現代の『まちな里山』が果たす役割はさらに膨らみそうだ。

間引き、落葉かき、腐葉土づくりや園路整備など季節ごとの作業に余念がない。

「里山のキーワードは循環。維持管理しながら里山の材をどう活かしていくかがポイント」という栗林さん。コア会議のメンバーでもある明正小学校の里山授業でも、子どもたちに「いのちの繋がりを大切にしよう」と伝えていく。

コア会議のメンバーとして当初から里山づくりに関わる村松さんも、子どもころから近辺に住まう。庭作りが好きな父親の手伝いを経て、庭を受け継ぐと、みどりへの関心がさらに高まり、定年退職直後からトラマリのボランティアをあちこち兼ねている。

「三丁目緑地は人の手をかける範囲が広く、その分、可能性も大きいのがいいね」とやり甲斐をのぞかせる村松さん。

緑地の管理はハードなこともある。趣味の登山との相乗効果で体力も維持しつつ、みんなであれこれアイデアを出しあうので、作業を通しての発見も魅力だという。「下草を刈ると草花が顔を覗かせてくれる。この緑地は手を入れると応えてくれる感覚があるんです」と笑顔で話す。

ところが最近では緑地の手入れが追いつかず樹木の荒れが目立ち、高木化

里山は人が関わる必要があることを改めて認識できました。(女性)

里山体験教室 参加者の声

近所に住んでいるので、虫が大好きな子どもを連れて、ふだんから頻りにここを訪れています。バッタやトンボなど、いろんな虫がいるので楽しみです。(男性)



国分寺産線をとどって、やはり成城がいいと決めて転居してきたばかりです。身近にこんなに素敵なおとこがあり、里山体験の機会もあって、これから周辺に出かけるのが楽しみです。(ご夫婦)

子どもがいつもここに遊びに来ているので、今日は参加してみました。思っていた以上に自然が多くて湧水もあって、また来たくまりました。(女性)

きれいな公園はあっても、たいてい土が堅いのですが、ここは地面の具合もよくて、子どもに自然の様子を知らせることができます。(女性)

80年以上も下祖師谷(現在の成城7丁目)に住んでいるのに、こんな素敵なおとこが3丁目にあったなんて知りませんでしたよ。初めて参加したけれど、いやあ、気持ちよくておどろいたね。(男性)



カブトムシの幼虫に子どもが興奮しています。自然のなかだとやっぱり大きくなるものですね。ここは大人も子どもと一緒に楽しめるところで、今日はいろいろ勉強になったので、また参加したいです。(男性)



今、中学生の娘は、児童館に遊びに来ていた小学生のころ、ここで風に吹かれながらお弁当を食べるのが好きだったみたいです。(女性)



もともとこの辺りに住んでいて、25年ぶりに戻ってきました。当時は秘密基地とか作って遊んだものです。自分のかつての遊び場で子どもと一緒に遊べると思っていなかったので、うれしいです。生きものが好きな子どもたちも喜んでくれてよかった。(男性)

ぼくの好きな場所は「橋を渡ったところ」。生きものがいておもしろいから。(小学1年生)

息子とサッカーの練習で坂でトレーニングしたり、起伏が楽しいので通り道として使っています。ふだんはそれぞれに使っていますが、今日は家族一緒に参加しました。(男性)



アクセス
成城 3-16
小田急線「成城学園前」駅下車
徒歩9分

成城三丁目緑地は 学校の宝です!

明正小学校



竹の枝打ち(4年生)



斜面のササ刈り(6年生)



明正小学校 小林校長

「いのち溢れる緑地は子どもにも学校にも宝そのもの!」小林校長の口調には緑地に寄せる全校の熱い思いがうかがえた。

「夢中でドンガラを拾う子どもたちや、湧水でサワガニを見つけて目を輝かす子どもたちを見ると、恵みをいただいていると感じます」と語るのは小林佳世校長。「里山は人の手で保全する」というみなさんからのメッセージの成果か、緑地のゴミ拾いを自主的にする子どもたちも増えているとか。

成城三丁目緑地にまさに隣接する世田谷区立明正小学校。2001年度よりコア会議のメンバーとしてボランティアの協力の下、総合的学習に里山授業を取り入れている。1年生は里山散歩。学年ごとに落葉かき、竹材の活用、6年生ではササ刈りなどの趣向をこらした保全プログラムを全ての学年で行っている。

前のめりになるほど 興奮するフィールド

街の木ものづくり
ネットワーク



マチモノ 横山さん



成城三丁目緑地では、樹の観察会を続ける人たちがいる。一般社団法人街の木ものづくりネットワーク(通称「マチモノ」)さん。都市の木(街路樹、公園木、庭木等)など、身近な自然から得られる恵みをまちの資源ととらえ、伐採した木も含めて活用に取り組みグループだ。

樹々を介して
多くの人と
コミュニケーションを

成城三丁目緑地での観察は、まずは樹を知ろうという趣旨で2019年2月からスタートした。「たまたま裸木の時期から始めたのがよかったようです。ひと月ごとに芽が出たり葉が出たりと変化していく中で、何の樹か判明していく...とクイズのようでした」と語るのは理事の横山さん。

観察に適したフィールド探しをトラマの取り持つ縁で三丁目緑地に決めたという同グループ。今後はトラマをはじめ、他の団体ともコラボして楽しい企画を実現できたら、と希望は膨らむ。樹木を介して人が集い、コミュニケーションが広がることこそ、「まちの里山」ならではの光景に違いない。

好奇心旺盛なメンバー7、8人が月に一度図鑑持参で緑地に集まり、それぞれお気に入りの樹々をチェックする。当初は虫が苦手だった子どもも、気がつくと、マクロレンズを覗き込んで毛虫の美しさに感嘆したり、葉裏のシラミに前めりで見入ったりと、驚きの変わりよう。数か月後に「ケヤキだけは

分かるようになった!」というメンバーもいて、知識も意欲も日々更新されているようだ。植物や昆虫に詳しい人も観察会では教えないことがルール。だからこそ、一人一人の自主的な探求が答えにたどり着き、身につくのだという。

「まち」へ「参加」することの意味

甲斐徹郎

この財団情報誌「ひと・まち・自然」では、世田谷で展開されている様々なボランティア活動が紹介されていますが、こうしたボランティア活動を通して「まち」へ参加することの意味について、「みどりのまちづくり」という観点から考えてみたいと思います。

■「みどり豊かなまち」が生まれるメカニズム

「みどり豊かなまち」というのはどのようなように生まれるのでしょうか。私たちの暮らし「まち」は行政によってつくられていて、私たち個人の力ではどうこうできるものではないとほとんどの人が思っていると思います。ですが実はそうではなく、「まち」は私たちの関わりが大きく影響して形づくられています。

そのことを理解する上でとても参考になる「まち」があります。それは沖縄本島の北部に位置する備瀬（びせ）という集落です。備瀬は、全体がすっぽりと森に包まれたような集落で、一軒一軒の様子を見てみると、それぞれの家をしっかりと包み込むように敷地の周囲に整然と緑が植えられていることがわかります。



備瀬の集落 ～みどりのトンネルのような小径が縦横にどこまでも続く

では、この備瀬のまちから学ぶ「みどり豊かなまちが生まれるメカニズム」とはなんでしょうか。そのことを理解するために、今度「イワシの群れ」の話をしたと思います。実は「備瀬の街並み」と「イワシの群れ」との間には共通した特徴があるのです。

まち全体の環境は、全体を支配する強力な指導者によって形づくられるのではなく、個々の関わりによって生まれ、維持されているということなのです。

■現代の「まち」に失われているもの

こうしたかつての美しい集落に対し、私たちの暮らし現代のまちは、どうして備瀬のような調和のある美しい環境が失われてしまうのでしょうか。

沖縄の現代のまちなみから、その原因について見てみましょう。1970年代以降になると沖縄の住宅地には樹木がほとんどなくなり、備瀬のような美しい街並みは生まれなくなります。いったい何が起きたのでしょうか。それは、沖縄では1960年代後半に入るとこれまで木造だった一般の住宅がコンクリートで造られるようになったからです。その結果、住まいはとも堅牢になり、台風から暮らしを守るために樹木を植える必要がなくなります。こうした住まいの性能の向上によって、暮らしは建物単体での完結性が高まり、隣り合う個と個との関係性は途絶えることとなります。こうして「自己組織化」のメカニズムは働かなくなり、美しい全体性は生まれなくなるわけです。

こうしたことは沖縄だけでなく、現代の私たちの暮らし全般で起きています。私たちの暮らしに必要なものはそのほとんどが商品として提供されていて、私たちの暮らしは多くの場面でその提供者によってお膳立てされるようになりました。その結果、暮らしにおける自らの主体的な取り組みが少なくなっています。

そうして私たちの暮らしの場において「個の主体化」と「個と個との関係」のどちらもが失われ、まちの美しい環境を創り出す「自己組織化」のメカニズムが働かなくなってしまうわけなのです。

数万尾のイワシが泳ぐ群れの様子を思い浮かべてください。その群れは秩序をもった美しいカタチを形成しています。そこにマグロなどの外敵が襲いかかってきても、イワシの群れはバラバラにはならず、全体として泳ぐ方向を瞬時に変えてマグロからの攻撃をかわします。そして、群れのカタチを大きく変化させながらも秩序をもった美しい全体性は維持されます。

イワシの例だけではなく自然界の中にはこうした美しい全体性が生まれ保たれる構造が多く存在しています。こうしたメカニズムは研究者たちによって解明されていて、その原理は「自己組織化」と呼ばれています。「自己組織化」とは、隣り合う個と個との関係が美しい全体性を生み出すメカニズムのことを言います。

あのイワシの場合を確認すると、イワシの中にリーダーがいるわけではなく、イワシそれぞれは常に主体的であり自由意志を持って泳いでいます。ただそこに、隣り合うイワシ同士の間にある一定の関係を維持しあうという単純な行動ルールが共有されていて、その関係が連続的に繰り返されることによって、あの美しいイワシの群れは形成されているということがわかっています。

このメカニズムが作用する条件を整理すると、そこには2つのポイントがあります。ひとつは「個の主体化」です。それは、個は常に自分の意志にもとづいて行動する主体であるということです。もうひとつは「個と個との関係」です。それは、個と個の間に一定の関係が維持されていることです。この2つです。これらの条件が揃うと、美しい全体が形成されるのです。

最初に紹介した備瀬の集落の場合も、まち全体のカタチをつくるうとするリーダーがいるわけではなく、自分の家を台風から守ろうとする個々の取り組みが連鎖して出来上がっているのですが、それはちょうど「イワシの群れ」と同じ「自己組織化」というメカニズムが作用しているわけです。

■「まち」へ「参加」することの意味

自分の暮らしまちの環境をどうすれば変えられるか。その始まりとなるのが、暮らしにおける「主体性の回復」です。そこに、この誌面で紹介されているようなボランティア活動を通して「まち」へ参加することの意味があるのです。

自分と「まち」との関係を考えるとき、2つの捉え方ができるとあります。ひとつは、「まち」というものは既に常に出来上がっていて、自分はそれに従って生きている」という捉え方。もうひとつは、「まちは自分の関わりとの相互作用によって、いくらでも変えることができる」という捉え方です。どちらが正解かということではなく、私たちの捉え方次第で「まち」は変えることができるということなのです。自分の関わりが「まち」全体に影響していることを見極めるバロメーターは、「ワクワクしている自分」がそこにいるかどうかということです。そのワクワクしている感覚こそが、自分の「主体性」が発揮されていることの証しだからです。

そして、次に重要なのが、そのワクワクは他者へも影響しているかということです。この2つのが自分とその周囲との間に起こっているか、皆さんの活動は必ず「まち」に対して影響します。そんな「ワクワク」の連鎖反応こそが「まち」へ参加することの醍醐味なのだと思います。



甲斐 徹郎 (かい てつろう)
都留文科大学文学部社会学部
非常勤講師
立教セカンドステージ大学
非常勤講師

1959年東京都生まれ。千葉大学文学部行動科学科(社会学専攻)卒業。
地域の環境資源を最大限に活かした数多くの環境共生型住宅のプロデュースを行う。
環境省「都市緑地を活用した地域の熱環境改善構想検討会」委員、東京都再生可能エネルギー戦略策定委員会委員、公益信託世田谷まちづくりファンド運営委員、日本経済団体連合会「ゆとりある豊かな住生活を実現する国民推進会議」副会長など歴任。
著書「不動産の価値はコミュニティで決まる」(学芸出版社)他多数

新しい街並みの間に、重層的な歴史の積み重ねを見つけつつ歩く

用賀〜二子玉川の間は、ここ30年ほどの間に新しくつくられた街並みも多く、新たな街の魅力を愛でる散歩という印象がある。が、実際にじっくり歩いてみると、いろいろな歴史文化を感じることができる。昭和以前に国分寺崖線上に建てられた別邸の記憶。江戸の庶民が大山詣に利用した大山道の名残り。いくつもの古刹。かつて農村だった面影など。街が変化していく中で工夫や魅力を味わいながら、重層的な中へ潜って行ってみよう。

現代的な ビジネスタワーから 農村の記憶へ

用賀駅から 瀬田農業公園へ

東急田園都市線用賀駅の北口は周辺のランドマークである世田谷ビジネススクエアに直結した出口。地上とを結ぶ巨大円形階段にまず目を見張る。ここを上って地上に出ると、クスノキの並木が出迎えてくれる。足元の艶やかなグレイの舗装は、兵庫県の淡路島で生産される淡路瓦を敷き詰めたもの。用賀駅北口から世田谷



玉川台二丁目五郎様の森緑地



瀬田農業公園 (Fラワーランド)



武家屋敷門



瀬田四丁目旧小坂緑地 (旧小坂家住宅)



瀬田四丁目旧小坂緑地は、国分寺崖線の高低差を如実に感じられるところだ。正面口から入って右手の階段を下っていくと、ここが世田谷かと思うような幽谷に降りていくことができる。高低差がかなりあり、また未舗装なので足元に注意する必要があるが、減多に体験できない庭園巡りが楽しめる。正面口を直進すると区指定有形文化財の旧小坂家住宅があり、内部を見学できる。スタッフの話聞きながらの邸内の見学はもちろん、国分寺崖線に沿って建てられた邸宅群も

美術館(都立砧公園)に続く用賀プロムナードの始点になる。この道は、舗装材に瓦を採用したことから「いらかみち」とも呼ばれる。今回の散歩は、この道を北の方に進むことから始まる。途中、右手に無量寺という古刹がある。いにしえの大山詣の旅人が寄り道するような気分での境内に寄ったり、道筋には小倉百人一首の歌が刻まれているので、ひとつひとつの歌を味わいながら歩を進めるのも楽しい。道は、無量寺を過ぎた辺りで左に折れる。進むとオフジエや水路、不思議なデザインの街灯など様々な趣向が凝らされた道に入る。この道、実は自動車も通れば道沿いにお住まいの方々も利用する生活道路なのだ。これは区が「コミュニティ道路」という趣旨で整備したもので、一般道路にこうした趣向が凝らされているのはかなり珍しい。用賀プロムナードを抜け、住宅街をしばらく歩き、東名高速道路の高架を潜ると、右手前方に玉川台二丁目五郎様の森緑地(※)の、山のようなみどり

国分寺崖線の 魅力を味わい尽くす

瀬田四丁目旧小坂 緑地から行善寺へ

瀬田農業公園から瀬田四丁目旧小坂緑地(※)を目ざす。途中、多摩川テラスという集合住宅の敷地内には、岡山藩池田家城代家老伊木家の下屋敷の表門が「武家屋敷門」として移築されている。外観の見学は自由だが、私有地内なので、お住まいの方々の迷惑にならないよう注意しよう。

が見えてくる。代々この地で農業を営んできた高橋家の敷地で、かつては屋敷もあった。現在は区が緑地として整備し、一部は市民緑地として公開している。世田谷一帯が農地や雑木林であったことが偲ばれる場所だ。園内を歩くと、次々に木々の風景が移り変わっていく様が楽しく、また季節によっても印象が変わるので、ぜひ何度も訪れたい場所である。五郎様の森緑地から西に進み、道なりに歩いて環状八号線を渡ってしばらく行くと、瀬田農業公園(※)がある。「フラワーランド」という呼び名で親しまれ、バラやハーブなどテーマにあわせて様々な草花がゾーニングされている。園内には思いがけない小径があったりするので、時間の許す限りゆっくり鑑賞したい。ベンチやテーブルも設えられており、時間帯によってはお弁当を広げても気持ちよい。また、園芸講習会や花まつりイベントなども開催しているので、様々な楽しみ方ができそう。周囲には今でも畑が広がり、かつての世田谷の面影を感じさせてくれる。

- 区立玉川台二丁目五郎様の森緑地
1982年から世田谷区が借受け「自然観察林」として活用していた樹林地。大部分が区有地化され、残る民有地はトラまちが管理する市民緑地として保全し、一体的に整備し2017年より一般公開。緑地名は、元土地所有者の「先祖・高橋五郎右衛門」の名から、古くから地元で「ごころさまのもり」と呼ばれていたことに由来する。緑地の中では、区内公園の落葉から腐葉土を作り、カブトムシの飼育も行われている。開園時間は午前9時半から午後5時(1〜3月は午後4時まで)。
- 区立瀬田農業公園(フラワーランド)
「花」づくりにできる公園」として、1986年に誕生。ボランティアが花壇等の維持管理に主体的に関わり、季節ごとに楽しめる花つくり活動を行っている。そのほか、園芸相談も行っている。開園時間は午前8時半〜午後6時(10〜3月は午後5時まで)。
- 区立瀬田四丁目旧小坂緑地
国分寺崖線の斜面樹林の一部。園内には世田谷区指定有形文化財「旧小坂家住宅」(実業家政治家として活躍した小坂順造の別邸として昭和初期に建築と、紅葉や竹林も美しい湧き水の流れる回遊式の庭園がある。開園時間は午前9時半〜午後4時半。



旧小坂家住宅

想像してみよう(かつてはこの
ような邸宅が、国分寺崖線上の
この辺りに数多く建てられて
いたのだ)。

旧小坂緑地を出て玉川病院
の建物を正面に左手に進むと
急坂が現れる。ここも国分寺
崖線の高低差を味わえるポイ
ント。坂を降りきって今来た道
を仰ぎ見ると、この高低差の崖
が立川市からここまで続いて
いるのかと、そのスケールに驚
くはずだ。

少し東南方向に進むと、国
道246号を潜る瀬田アールト
ンネルが見えてくる。国分寺
崖線の緑と多摩川の水の風景
と二子玉川再開発の様相をモ
チーフにしたモザイク壁画を
楽しみながら通過しよう。

トンネルを通り抜けたらそ
のまま直進し、突き当りを左に
曲がり、かなりきつい坂と階段
を上ると線路を越える跨線橋
に出る。

ここからの景観も見逃せな
いが、跨線橋の先の瀬田夕日坂
を登りきった右手にある行善
寺からの眺望、通称行善寺八
景は今回の散歩の大きな見ど
ころのひとつ。二子玉川の街並
みや、天気良ければ遠くは秩

父の山や富士山までを一望で
きる。

ちなみに行善寺門前の行善
寺坂(※)は大山道の道筋なので、
大山詣の旅人の中には休憩が
てら境内で行善寺八景に目を
見張った人も多かったろう。古い
書物によると徳川十一代将軍
家斉なども訪れたということ
である(将軍家斉が訪れたこ
とにより、行善寺では葵紋の使
用が許されている)。

なお、境内にはかつて一大歓
楽街だった二子玉川の町で数
多くの三味線が普及したこと
を今の世に示すね(塚や、ひと
際目を引く珍しい樹形の三叉
ヒノキがあるので、これらも忘
れずに見ておきたい)。

大山詣の記憶を 辿りつつ 新しい区立公園へ

二子玉川駅前から
二子玉川公園へ

行善寺から大山道に沿った
形で下り、丸子川にかかる調布
橋を渡ればもう二子玉川駅前
は近い。ちなみに調布橋を渡っ
てから左折すると、川沿いに大
山詣の記憶を残す遺構、南大

山道道標がある。

二子玉川駅前には1985年
に二子玉川園(遊園地)が開園
した後、大規模な再開発が計
画され、2010年以降には商
業施設や映画館、高層住宅、オ
フィスビル等が次々に建設され
た。昔の二子玉川駅前を知る
人には、まったく別の街に映る
だろう。

調布橋からまっすぐ進むと
やがて到着する東口にはバス
ターミナルがある。商業ビルも
林立していて一見複雑な道筋
だが、ちょっと行くと前方に堤
防の土手が見えてくる。多摩堤
通りを渡って、土手の上を歩い
てみよう。春には迫力のある美
しい桜並木が楽しめる。春の訪
れとともに、また訪ねてみたい
場所だ。

二子玉川のタワービル群の
先にあるのが二子玉川公園。公
園の門柱は、かつての遊園地の
ものを再利用している。(門柱
の裏面には当時の「二子玉川
園」の文字がそのまま残されて
いるのもおもしろい)

公園中央部には回遊式日本
庭園「帰真園」があり、日本庭
園内には現在の玉川病院の敷
地内にかつてあった旧清水家住

宅書院が移築されているほか、
野点をイメージした茶室など
もある(躰口まで設えられてい
る)。また、この日本庭園は石
を巧みに使った造園も特徴で、
上り下りする石段では手すり
の代わりに設えられている「手
岩」の感触も楽しみたい。ちな
みに園内の池の水は循環式で
流れており、災害時にはこの水
が公園内のマンホールトイレに
利用されるそうだ。

二子玉川公園からの景観を
楽しみ、二子玉川駅に戻って散
歩終了。今来た道を駅まで戻っ
てもよいが、公園の眺望広場か
ら多摩川の河原に出て駅方向
に歩き、かつて多摩川の向こう
岸とを結んだ二子の渡しの石
碑を見てから駅に戻ってもよい
だろう。今日歩いた道がかつて
多くの旅人で賑わった大山道
に沿った道であったことを、よ
り深く味わえるはずだ。



瀬田アールトンネル



移築された旧清水家住宅書院



行善寺からの眺望

● 行善寺坂

行善寺の門前から調布橋を経由し
て二子の渡しに至る急坂。あまりの急
勾配にこの坂道を登る際は身体が行
火を抱いたように熱くなるため、「行
火坂あんかざか」とも呼ばれる。



一般社団法人 おやまちプロジェクト
代表理事
たかの ゆうだい
高野雄太さん
世田谷区尾山台周辺の住民、学校、商店の
みならず、大学や自治体、かかわりのある企業
までが横断的に集まるチーム、それが「おやま
ちプロジェクト」です。世代や属性といったさ
まざまな垣根を越え、人と人がつながること
で出てきた大きな可能性について、生まれ
も育ちも尾山台、そしてプロジェクトの発起
人でもある高野雄太さんに伺いました。

人をつなぐ 地域を繋ぐ 未来を紡ぐ人

ひとたび家を出ると、行き交う人々み
んなが知り合い。——まるで、漫画「サザ
エさん」のひとコマのように、町中の人があつ
ながっている。そんな世界観を目指して、
『おやまちプロジェクト』をスタートさせ
たのが高野雄太さんです。

学生結婚をし、人生の早いうちからパ
パとなった高野さんですが、大学卒業後に
就職した会社での仕事はとてつもなくハードで、
「起きている間はすべて働いているような
状態」。可愛い盛りの子どもたちとふれあ
う時間が持てないことに、疑問を感じるよ
うになりました。

そんなとき、気になりはじめたのが生
まれ育った尾山台の商店街。ゲーム機が
身近だった一方で、缶蹴りやゴム跳びと
いった身体を動かす遊びも健在だった幼
少期、商店街は自由に走り回って遊べる公
園のような存在でもあったそう。

「地域の人たちに育てられたという実
感がある」と話す高野さん。自身の子ど
もたちにもそんな育ち方をしてほしいと、
実家の洋品店を継ぎ、再び尾山台を暮ら
しの拠点にすることに。そこで、まず目の
当たりにしたのは、古くからのお店が次々
に閉店していくという現実です。

「代わりに入るのはいわゆるチェーン店
などのテナントさん。確かにそういう時流
ではあるけれど、そればかりになつてしま
うと街としての魅力や個性が薄れてしま
います。人口減少社会の今、街の魅力が薄
れば住みたい人も減っていく。大好きな
尾山台の街がそうならイヤですよ。ね。
ですから、街の未来のために、商店街を
真剣に考えなければいけないと思うよう
になりました」

独りでは、限界があるしつらい。仲間
間探しをスタートさせた高野さんにとつ

て、とりわけ大きかったのは、東京都市大
学都市生活学部の坂倉杏介准教授との
出会いでした。まちづくりやコミュニティ
づくりの専門家とそれを学んでいる学生
たちが加わることで、『おやまちプロジェク
ト』はイベントを開催しておしまいでなく、
日常的に取り組める、連続性、継続性
のあるプロジェクトになりました。

「ただ、このプロジェクトは何か明確な課
題を解決する集まりではありません。尾
山台周辺に関わるあらゆる人をとにかく
つなぐ、それが目的なんです」
なぜなら僕たちは、人と人がつながら
なければ絶対ステキなことが起こると知っ
ているから、と話す高野さん。まずはつな
がる、そのうえで、つながった人の思いや夢
を聞く。言える環境づくりをする。おや
まちプロジェクトは、そこで初めてその夢
や思いの実現を応援するという目的を持
つのだとか。

昭和のホコ天ブーム以来続いている商店
街の歩行者天国は、今や放課後の子ども
たちの遊び場。ママパパ同士の情報交換の
場にもなっています。ここでは、都市大学
の学生たちが子どもにとつての良き兄、姉
に。毎月開催の子ども食堂改め「カレー食
堂」は地元農家さんからの食材の提供も
あり、さまざまなバックグラウンドを持つ
人たちの集いの場になっています。また、商
店街のワイン専門店・八幡屋蔵部で開催
される角打呑み会「バーおやまち」は、地
域に入りにくいといわれる独身世帯やD
INKS世帯などを巻き込むきっかけに



ホコ天は毎日16~18時。水曜を中心に都市大生が活動中。

になりました。

プロジェクトを発足して3年、今では高
野さんが介在しなくても、街のあちこち
でつながりの化学反応が起きているとか。
もともと目指していた「商店街をコミュニ
ティの場に戻す」という目的は、実現に近
づいているように感じます。

「一番実感している変化は、みなさんが
『つながりが増えた』と感じていること。
日常生活を送っている街で、ふらっと遊び
に行ける場所がある、飲みに行こうと誘
える人がいる。ただ住んでいるだけではな
く、それが『この街に暮らしている』とい
う深い実感になっているようです。僕はず
もも知っていたけれど、その実感をも
多くの人が感じてくれているのがうれしい。この
先、さらにもどのような変化が起ころのか
はわかりませんが、このまま継続していけ
ば、尾山台の未来はきっといいものになる
という漠然とした確信が、今の僕にはある
んです」

トラまち TOPICS



財団の新たな拠点や取り組みをご紹介します。

地域共生のいえ「きんしゃい」(下馬4)がオープン

住まいを地域にひらく取り組み「地域共生のいえ」。新たに「きんしゃい」が仲間入りしました。年齢に関わらず、誰もが自身の想いを話せる場として「おしゃべりカフェ」をひらいています。また、長くファッション関係の仕事をしてきたオーナーの特技を活かし、年齢や体型に合った着こなし方をアドバイスする「ファッション相談室」も同日に開催。参加者の方に喜ばれています。

空き家等地域貢献活用相談窓口をとおして親子の集いの場が誕生

相談窓口を通じて建物オーナーと出会ったNPO法人せたがや子育てネットが「おでかけひろば おりーぶ」(奥沢2)を開設しました。戸建住宅の1階一部と庭を活用した、プレママ・プレパパや未就園児の子どもと保護者のための居場所では、利用者と地域の人たちが食でつながる「おくめし」というプログラムも行われています。



地域共生のいえづくり支援事業が都市住宅学会賞業績賞を受賞

地域共生のいえづくり支援事業が、公共政策が踏み込み難いところにチャレンジした独創的な取り組みである点とこれまでの15年の実績に対し、この度評価をいただきました。住まいを地域へひらくことに賛同して下さったオーナーのみなさま、活動を支えて下さっているみなさまに心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに今後も多様な地域交流の場の創出に励んでまいります。



祖師谷四丁目小さな森が新しく仲間入りしました

イングリッシュガーデンに憧れ、バラを愛するオーナーが丹精を込めた庭が、新たな小さな森として仲間入りしました。第1回目のオープンガーデンは2月20日(木)に決まりました。庭にそびえるミモザアカシア。黄色くてかわいらしい花は早春に見ごろを迎えます。ぜひお越しください。今後は、バラの季節にも開催する予定です。(事前申込み制・詳しくはお問合せください。)



10/5(土) 世田谷のトラスト運動30周年記念イベントを開催

『地元(ローカル)・世田谷を楽しむ実践者と語るシンポジウム』を成城ホールで開催しました。世田谷のトラスト運動は、平成元年のトラスト協会発足時に、ナショナル・トラストを参考にしつつ、一方で「街に誇りと愛着を持ち、育てる」というシンビクトラストの精神により、区民参加によるみどりのまちづくりを進めることからはじまりました。財団とともに活動するトラストボランティアの数は延べ約600名にもなります。当日のイベントでは、これまでの30年にわたる取り組み展示や、ボランティア活動団体の紹介のほか、ゲストスピーカーを招き、トークセッションを行いました。テーマは『わたし流「楽しい」からはじまるセタガヤ暮らし』。実践者6名の方にそれぞれの楽しみ方、暮らし方についてお話しいただきました。後半は、ゲスト・参加者が同じテーブルで感想をシェアしながら、地元で楽しく活動することについて語りあいました。当日の様子は、財団のホームページでご覧いただけます。



10/31(木) 区内中小企業者を対象に実務講習会を実施

公共施設の改修工事に携わる建築・電気・機械事業者等を対象とした実務講習会を開催しました。今回は、『安全で快適に働くために』と題し、健康診断の大切さや日々の食事についてなど身近なテーマに、皆さん熱心に聴講していました。写真は講義の初めにストレッチをしている様子です。年度末には、最新事例の現場見学を予定しています。



区立次大夫堀公園内里山農園で活動がスタートしています

7月1日に開園した里山農園(喜多見5-5)では、ひとにも生きものにもやさしく、誰もが一緒に楽しみ活動できるプログラムを実施しています。活動は毎月第4水曜日9~11時頃。一緒に野菜を育ててみたい方、ぜひお待ちしております。(詳しくはお問合せください。)

みなさまにささえていただきながら、世田谷の環境を守り育てています

みなさまの会費は、世田谷の環境を守り育てる費用として大切にに使わせていただいております。今年度は、新たに2か所の市民緑地を公開しました。



本橋家の竹林市民緑地
(粕谷2-11-32)
せたがや百景及び第3回地域風景資産に選定された、旧家の庭園内の竹林です。地域の原風景に触れ歴史を感じられる場所です。



花の木市民緑地
(上祖師谷5-9-2)
花や実など四季折々の変化を楽しめる庭木を集め、育てていた樹木畑です。身近な樹木園のような緑地です。



ご寄附のお礼

2019年4月1日から10月31日までに、1,257,399円の寄附金(会費、一般寄附)を皆さまからいただきました。誠にありがとうございました。4月よりトラストまちづくり会員制度へ変更いたしました。今後も引き続きご支援いただきますようお願い申し上げます。

トラストまちづくり会員大募集



キャンペーン期間
2019年12月1日
~2020年3月31日

キャンペーン
限定カラー
マロン・紫・牡丹
どの色が届くかは
お楽しみに!

期間中、下記のお手続きをした方に
**オリジナルてぬぐい
プレゼント!!**

新規入会
賛助会員に入会した方(個人・家族・法人)
有効期限を2021年3月末まで延長

- 3年会員**
3年会員に変更した方
- 家族会員**
個人会員から家族会員に変更した方
- 自動更新**
自動引落をお申込みの方
- クレジット払い**
クレジットカードでのお支払いをお申込みの方

※子ども会員・学校会員・特別会員はキャンペーン対象外となります。複数キャンペーンが対象となる場合でも、対象となるのは一つのキャンペーンのみとなります。詳細はトラストまちづくり会員担当までお問い合わせください。

会費種別と年会費	1年会員	3年会員
●個人賛助会員	1口1,000円	3年会員 1口3,000円
●家族賛助会員	1口2,000円	3年会員 1口6,000円
●法人賛助会員	1口10,000円	3年会員 1口30,000円
●子ども会員	小学校在学期間 1口1,000円	
●学校会員	無料 ※世田谷区内の小中学校が対象	
●特別会員	永年 個人100,000円以上 法人500,000円以上	

- ### 会員特典
- 1 会員証発行 ※学校会員除く
 - 2 トラストまちづくり情報誌等の送付 ※希望者に送付します。情報等は財団HPからもダウンロードできます。
 - 3 事業協力者からのサービス提供
 - 4 イベント参加の優待

- 会費の使途を以下の3つから選択することができます。
- 1 **トラスト基金** (世田谷区内の自然や歴史的・文化的な住まいを守る費用)
 - 2 **まちづくり活動基金** (区民主体によるまちづくり活動を支援する費用)
 - 3 **おまかせします** (2つの基金に1/2ずつ入れさせていただきます)

案内パンフレットをお送りします

パンフレットをご希望の方に「ヤモリのモリモリ」缶バッジをプレゼント

tel 03-6379-1620
fax 03-6379-4233

世田谷のみどりの生命線
 “国分寺崖線”
 その崖線の魅力を満載した
 散策マップを再編集。
 おすすめルートをまとめた
 小冊子を新たに収録。



女性読者必見!!

国分寺崖線散策マップ (改訂版)

定 価	1,000 円
会員価格	800 円

“国分寺崖線”を知っていますか

豊かな自然が広がる国分寺崖線は、太古の多摩川によって削られた河岸段丘で、高低差が10～20mほどあり、ここへ来るととても都会にいるとは思えないような光景が広がっています。わたしたちのすぐ身近にある国分寺崖線の魅力を、より多くの皆さんに知っていただきたい！そんな思いから、世田谷区内の国分寺崖線のあらゆる情報を盛り込んだ初の完全版イラストマップを2000年に作成。2019年3月におすすめのポイントを散策ルートにまとめた小冊子を付けてリニューアルしました。

New
別冊



●サイズ：420×891mm(ケース入り)



トラまちPress

ひと・まち・自然 Vol.18
 2020年1月発行
<https://www.setagayatm.or.jp/>

発行 一般財団法人 世田谷トラストまちづくり
 〒156-0043 世田谷区松原6-3-5
 Tel 03-6379-4300(代表)
 Fax 03-6379-4233



【財団ホームページ】
 世田谷トラストまちづくり
<https://www.setagayatm.or.jp/>



【フェイスブック】
 世田谷トラストまちづくり
<https://www.facebook.com/tm.toramachi>



【ツイッター】
 世田谷トラストまちづくり
https://twitter.com/setagaya_tm

▲【ビジターセンター】成城 4-29-1 ☎ 03-3789-6111 ▲【フラワーランド】瀬田 5-30-1 ☎ 03-3707-7881